東京外国語大学国際日本研究センター主催 夏季セミナー＆サマースクール2016 ＜プログラムと概要＞

2016年7月19日(火)10:10-18:25、20日(木)10:10-17:55、21日(木)10:10-14:10

7/19 (火) 102室

10:10 | 10:55 司会 友常

『賤称廃止令の発布後における浅草新町の再編過程に関する一考察』

An Analysis of Asakusa-shincho's Reorganization following the Promulgation of the Edict Abolishing Ignoble Statuses

ジョン ポーター氏(東京外国語大学)

本報告では、東京都公文書館所蔵の「順立帳」を主な材料として、明治初期浅草新町の再編過程をスケッチするとともに、その内部構成を復元する。「賤称廃止令」の発布まで浅草新町は穢多頭弾直樹(近世には弾左衛門)を頂点とする関八州賤民組織の政治支配の集約点をなし、弾直樹役所以外に、弾直樹とその配下の居住地、公事宿、皮革問屋、白山神社の境内地などもその内部に存在し、弾直樹を中核として包括性のある区域が形成された。しかし、「賤称廃止令」の発布により、弾直樹の賤民支配に関わる諸機構はすぐさま廃止され、新町は広域的な賤民組織の支配拠点としての特質を喪失し、市街地へ再統合されるべき対象として位置付け直された。本報告の前半では、東京府の再編措置を解析するとともに、新町の実態に即してその措置の実行過程を解明する。

さらに、「賤称廃止令」の発布後に新町の運営体制がどのように再編されたかを解明する。「賤称廃止令」の発布により、弾直樹は自らの従来の広域的支配権を失ったものの、新町の領域とそこに住み続けた住民に限って言えば、弾直樹を中核とする社会秩序は即座に否定されたというわけではない。むしろ、その秩序に依拠しつつ、東京府は新町の再編を進め、弾直樹一族の政治的ヘゲモニーを温存する形で新たな支配体制が次第に構築されたのである。本報告の後半部分では、亀岡町の運営体制の設置過程を再現するとともに、その歴史的意義について考えてみる。

10:55 | 11:40 司会 友常

「中国と日本における楊貴妃のイメージ」

The various images of Yang Guifei (Yōkihi) in China and Japan

リム ベンチュー氏(林 明珠氏)(シンガポール国立大学)

The Tang dynasty famous beauty Yang Guifei, also known as Yōkihi, has been a popular motif in artistic creations in both China and Japan. She has been immortalized in various theatrical and literary works including noh plays such as The Emperor and Yōkihi in Japan since the introduction of The Song of Everlasting Regrets (長恨歌)to Japan.
Yang's regular appearance in modern day popular media such as TV and film illustrates her continual appeal as an attractive character in the imaginations of contemporary people. This paper discusses the various images of Yang in both Japan and China, starting from noh plays in the Muromachi period and ending with two film portrayals of her in 1955 and 1960. While different genres emphasize different aspects of the character, this paper will identify some common characteristics that shared between the Chinese and Japanese representations of the character.

12:40 | 13:25 司会 望月

「敬語コミュニケーション」のキーワードー「丁寧」と「配慮」、「敬意」と「誠意」ー

坂本 惠氏(東京外国語大学)

「敬語」研究は単なる言葉としての「敬語」だけではなく、敬語を含んだ大きなシステムで見る必要があり、それを「敬語コミュニケーション」と呼ぶことにする。「敬語コミュニケーション」の基本原理は「相互尊重に基づく自己表現」と考えているが、その中で、今回は「相互尊重」特に相手に向かう気持ちについて考えてみる。日本語の敬語を考える場合、外せないのは「丁寧」というキーワードであるが、一方で「配慮」というキーワードもある。「丁寧」と「配慮」はどのように違うのだろうか。さらに相手に向かう気持ちを考えるとき、相手に対する「敬意」、はやりの言葉で言えば「リスペクト」と言ってもいいものも想定できると同時に、自分自身の気持ちで言えば「誠意」もある。「敬意」と「誠意」はどのような関係にあるのか、またこれは言語によって現れ方が違うものであるとも言える。そのような、敬語コミュニケーションにまつわるキーワードを考えてみたい。

13:25 | 14:10 司会 望月

「主観性の相違による言語使用への影響について」

A study about the influence of subjectivity bringing to language use

趙 華敏氏(チョウ カビン氏)(北京大学)

従来の言語研究は，特に二つ以上の言語を比較しながら見るとき，言語の構造そのもの，文法，語彙，音声などの面から見ることが多かったが，認知言語学研究の発展にしたがって，認知と言語の関係から言語を記述し，分析し，違う言語間の相違点と共通点を発見するのに新しい道が拓けてきた。
本発表は以下の点を中心に展開させていく。
(1)先行研究ですでに述べられたように，日本語は主観性の強い言語で，自己投入をして事態を語り，状況を把握するのに対して，中国語は話者が離れたところで事態を観察し，把握したり，状況を報告する傾向の強い言語である。そのような相違から，中国語人日本語学習者の使う日本語を観察し、分析してみる。
(2)主観性の相違による言語使用への影響を重視し，中日両言語を記述・解釈し，対照研究を試みたい。

14:20 | 15:05 司会 降幡

「日本語学習者における配慮コミュニケーションの輪郭の記述に向けて」

"The outline of communication by Japanese learners with focus on consideration display"

李 吉鎔氏(イ キルヨン氏)(中央大学校)(韓国)

日本留学時に、学習者として、いくつかのインタビュー調査に協力したことがある。調査者は親切だったが、調査に協力して残るものは、虚しさと悔しさだった。調査は学習者のためではない、と思った。本研究はその延長線上にある。
従来の日本語教育の現場では日本語の不適切な使用は矯正されるべき事象として捉えられてきた(ALM)。学習者言語についても、その内的体系に焦点が当てられてきたように思われる(中間言語)。しかし、グローバル時代になり、接触場面も増えてきた今日、学習者と母語話者の相互行為が重要であると考える。本研究では、学習者言語に対する「評価」研究の試みとして、学習者の日本語コミュニケーション能力の習得および使用に関して、話し相手の日本人教師による評価をもとに、円滑なコミュニケーションに関与する日本語能力とは何かを分析した。韓国人日本語学習者16組(女性2人1組)と日本人との日本語による会話を録画・録音した資料を分析した結果は、次のようにまとめられる。
まず、文法能力や談話能力のミスについては円滑なコミュニケーションとの関わりは少なく、断定的な言い方や話し相手の知識の保持のほどを問いかける質問など、社会言語能力の場合は評価が高くない。そして婉曲的な表現や謙遜表現の使用はよい評価につながることがわかった。配慮的コミュニケーションは、もはや「言語」そのものではなく、言語の使用者の態度ないし心構えの領域に入り込んでいく。学習者に本来備わっている固有の素性(built-in feature)でもあるが、日本語コミュニケーション能力の習得による成果ともいえるので、日本語教育の役割が重要であるといえる。

15:15 ~ 18:25

院生発表会@103,104,105,106

7/20 (水) 102室

10:10 | 10:55 司会 山口

私小説と現代――〈私〉をいかに語るか

Shishosetsu(I Novel) and the Present Time――How to Narrate the Self

柴田勝二氏(東京外国語大学)

私小説は近代日本における独特な自己表出の形式として明治・大正期から受け継がれてきているが、現代においてはその書き手は少なくなっている。その背後にあると想定されるのは、他者と差別化される〈私〉へのこだわりの希薄さだが、そうしたなかで現代における私小説の書き手としてリービ英雄や西村賢太らが挙げられる。リービはアメリカと台湾と日本の三カ国で育ち、英語と日本語の間を往還することによって作家となり、西村は中学卒業後肉体労働に従事しつつ、藤沢清造のようなかつての私小説作家を模倣することで作家となるという、ともにかなり特異といえる経歴の持ち主であり、そうした特異性に支えられた〈私〉を表出することが彼らを私小説の書き手としている。それを反映して彼らの主人公たちはいずれも外界との関係の危うさのなかに生きており、それゆえに自己に執着せざるをえない意識を語ることが彼らの作品に私小説性を付与しているのである。

10:55 | 11:40 司会 橋本

「文学と美術――川端文学の一端を見る」

Literature and Arts—some idea of Kawabata's works

范 淑文氏(ハン シュクブン氏)(国立台湾大学)

これまで、文学と美術の対話はさまざまな形で行われてきた。特に明治二、三十年時代頃には日本の画壇にも、文壇にも大きな変化が訪れ、文壇には文学と絵画のクロスの創作が社会的な風潮となってきた。そのためか、夏目漱石や佐藤春夫、武者小路実篤などの作家は絵画的な文学作品を沢山創作した。それが川端康成に至っては、絵画のみならず、陶器などの美術品までをも織り込んだ文学作品が登場してくる。こうした文脈の中にあって、東山鬼魁の絵に傾倒し、自ら彼の絵に解説文を付けたり、骨董品を集めたりするほど美術を嗜んでいた川端は、自らの文学作品において美術と如何なる対話をし、どんな役割を持たせ、また文学作品の中にどのように位置づけているのか、などについて明らかにしてみるのが本発表の主旨である。

お昼休憩(11:40-12:40)

12:40 | 13:25 司会 山口

「身体・人形・アイデンティティ――――ナオミと素子から考える」

Body, Marionette, Identity: In the Case of Naomi and Motoko

蕭 幸君氏(ショウ コウクン氏)(東海大学)(台湾)

谷崎文学における身体の問題についてはすでに多くの研究がなされてきたが、特に『痴人の愛』のナオミの身体は西洋化された象徴として、よく取り上げられる。今回の発表はそれとは異なった視点から、ナオミという人物の身体、そしてナオミを人形扱いする譲治とナオミの関係性に注目し、そこに込められた制度への抵抗を読み取り、ナオミが如何に自己の身体を通して自分のアイデンティティーを獲得していくかを明らかにしたい。また、こうしたナオミの身体描写に込められた命題が、やはり押井守が士郎正宗原作の『Ghost in the Shell／攻殻機動隊』『イノセンス(Innocence)』を映像化する際に、球体関節人形の使用や登場人物草薙素子の身体表現にも見られる。一見、関連性のないこの二つの作品だが、それぞれがその登場人物を通して、近代化される日本社会の制度を厳しく糾弾する姿が浮かび上がる。

13:25 | 14:10 司会 村尾

「『源氏物語』の卜占と夢合せの論理」

Logic of augury and Yumeawase in "The tale of Genji"

金 鍾徳氏(キム ジョンドク氏)(韓国外国語大学校)

洋の東西を問わず、古代人は卜占で人間の運命を判断し、人間の力ではいかんともしがたい人事に対して神や仏に霊験を祈願したようである。また夢を異世界との回路と考え、常に夢見ることをやまなかった。ところが、実人生の記録である日記文学では強い自意識と醒めた理性をもつ作者なかなか夢の霊験を信じようとしなかった。
『源氏物語』のような虚構物語に語られている高麗人の予言や夢占い、宿曜などは必ず実現され栄華を達成し物語の作意となって主題の縦軸を構成している。そこで卜占や夢合せは主人公の運命を決定し、信じようとするものには実現される虚構物語の進行原理となった。
今回のセミナーでは大陸の神話・伝説をからめながら『源氏物語』における予言や夢合せの機能を考察し、卜占や夢が主人公の運命を先取りし虚構物語の作意となる論理を読み直してみたい。

14:20 | 15:05 司会 春名

「日本人の他界観」

The Japanese Concept of the World of Death

徐 翔生氏(ジョ ショウセイ氏)(国立政治大学)(台湾)

死生観は国によって異なるものである。死後の世界観、すなわち他界観も宗教によってまた様々である。本報告では、まず古代から現代までの文芸作品を例としつつ、その中に描かれた死後の世界を探りながら、日本人の他界観の具体相を明らかにしたい。
次に日本人の他界観に如何なる宗教の要素が見られ、それが日本人の死生観にどのような影響を与えたのかについて論及したい。最後に仏教と神道の観点から、日本人の独特な他界観について議論したい。本報告によって日本人の他界観の解明、及び日本の思想文化研究に少しでも貢献することができれば幸いである。

15:15 ~ 17:55

院生発表会@103,104,105,106

7/21 (木) 102室

10:10 | 10:55 司会 坂本

「Can-doをベースとしたコミュニカティブ日本語教育及び日本語教科書の調査研究 —タイの高等教育機関における日本語教科書作成への応用の可能性— 」

"An Investigative Study of Communicative Can-do Based Japanese Language Education and Japanese Language Textbooks : A Feasibility for Application to Create Japanese Language Textbooks for Undergraduate Students in Thailand"

ケーオキッサダン パッチャラポーン氏(タマサート大学)(タイ)

タイの高等教育における日本語教育では日本の教科書の使用が一般的であり、タイ人学習者のための教科書はないに等しいのが現状である。しかし、近年の動向として、世界的にもタイ教育省の方針もまた学習者自身の目的もコミュニケーション重視であることから、使用中の教科書に変化をもたらす時が来たと考えた。そこで、Can-doをベースとしたコミュニカティブ日本語教育及び日本語教科書の調査研究を行い、日本とタイで調査研究した結果を考察する。そして、その調査結果を基にタイの高等教育機関における日本語教育の目標に合った人材育成のための教科書作成への応用の可能性を検討し、タイの高等教育機関のための日本語教科書作成を目指す。

10:55 | 11:40 司会 坂本

「 e-learningと翻訳教育 」

E-learning and translation education

尹 鎬淑氏(ユン ホスク氏)(サイバー韓国外国語大学校)

過去に比べ翻訳教育への関心が高まったと言えるが、依然として翻訳教育が体系的に行われていないのが実情である。しかし、翻訳でも誤訳の類型が共通して見られるため、体系的な教育が必要だと言える。
一方、インターネットの発達とコンピュータ技術の発展により、e-learningが幅広く行われている。また、e-learningは、様々な機能を有し、個々の学習者の学習に対するニーズや、習熟度に合わせた多様な学習形態および内容を提供することができる。従って、翻訳においても、インターネットや電子メール、翻訳支援ツールといったテクノロジーを用いたe-learning翻訳教育が必要である(井上2007)。
以上の点から、本講演では、韓国人日本語学習者の日韓翻訳の誤訳例を中心に、典型的な誤訳の類型を概観し、サイバー大学でのe-learningを活用した翻訳教育の実践的な事例や方法を紹介する。

12:40 | 13:25 司会 谷口

「上級日本語クラスにおけるニュース聴解と要約文作成」

Listening Comprehension and Summarizing Newspaper Articles for an Advanced Japanese Course

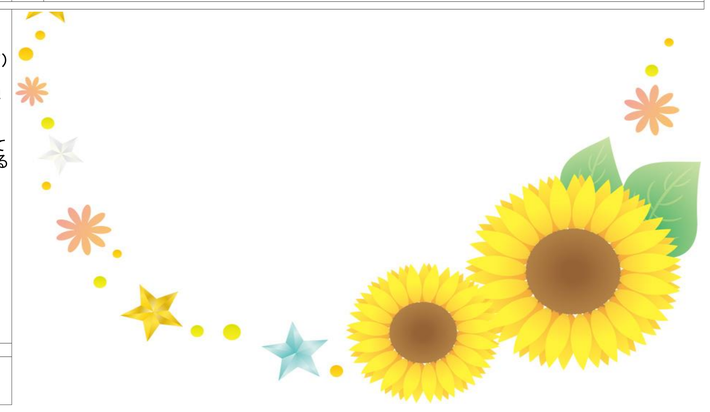
タサニー メーターピスィット氏(タマサート大学)(タイ)

現代社会に興味関心を持たせるために、日本語能力N1-2レベルの上級日本語学習者を対象に行った総合日本語の授業に「ニュースの日本語」を導入することを試みた。練習に用いたのは、『ニュースの日本語聴解50』の経済・金融及び社会・生活のニュースであった。アウトプット
能力を養うために、ニュースを聞かせた後、要約文を作成させた。クラス全体のフィードバックのほかに、ネイティブ教師に評価を依頼し、その評価内容を学生に提示した。また、学習者に能動的に参加してもらうために、学習者自身が選んだニュースのプレゼンも行ってもらい、そのニュースの要約もクラスの課題とした。ここではその実践例を紹介しながら、効果と問題点について考察する。
キーワード:ニュース　聴解　要約文　評価

13:25 | 14:10 司会 谷口

「日本語動詞連用形の名詞への転成に関する研究」

"The study of conversion of Japanese verbs from masu-form (coniunctive form) to nouns".

徐 一平氏(ジョ イッペイ氏)(北京外国語大学)

日本語には、動詞の連用形がそのままの形で名詞として用いられる。このような現象は従来の日本語学において「転成」と呼ばれ、その名詞形式は「連用形名詞」と呼ばれる。連用形名詞は日本語において基本かつ重要な語彙である。
しかし、転成の生産性が低いことや規則性が弱いこと、転成において不明な点も多い。
本講座は、日本語の動詞連用形が名詞への転成の考察を手掛かりに、連用形名詞ともとの動詞との関係を検討し、これら転成名詞の転成における規則性をより明確にすることによって、語形成論の意味も考えておきたい。